

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

ミュータント兵士

### 【作者名】

doragonika

### 【あらすじ】

ミュータント探偵の続編。

## 魔法の発見

俺の名前はカズナリだったが、全てを隠すため名前と容姿を変えた。そして国籍も偽装した。

容姿はレベッカの知り合いの変身能力者に変えてもらい、名前はジャックにした。国籍はイギリスだ。

レベッカ「前の日系のほうか容姿は好きだったのにな・・・」

俺「仕方ないだろ。まだケイトの謎を解かなければならないが今は我慢だな。」

レベッカ「まあこれでより、人前に出やすくなったんじゃない。」

俺「まあな、だが仕事がない。レベッカ仕事紹介してくれないか？」

レベッカ「じゃあ、カズナリじゃなくてジャックは能力を生かす仕事をしたいの？それとも魔法を習得する？」

俺「魔法ってなんだ？」

レベッカ「そついえば日本では魔法は禁止されてたわね。私はオーストラリア軍の魔術学校に通ってる。非能力者は基本的に魔術で能力に対抗するのよ。」

俺「だから日本の大会で非能力者として魔術というものを使わず格闘していたのか。」

レベッカ「私は今微力な治癒魔法に炎の魔術を覚えているわ。」

俺「俺は魔術はコピー能力でできないのか？」レベッカに触れながら言った。

レベッカ「コピー能力で魔法を使った事例はないわ。」

俺は触れたがなにも能力を感じなかったから本当らしい。

レベッカ「で、どうするの？」

俺「その前に東アジアでは魔法を聞いたことないぞ。」

レベッカ「日本、中国、朝鮮は魔力を国全体で封じてるからよ。そして魔法は空想として扱われているわ。」

俺「だが、実際は実在するということか。俺は魔術学校に行くべきだと思うか？」

レベツカ「まあ、行って損はしないわ。でもあなたが行かなくていいと思えばそれでいいと思うわ。」

俺は魔法学校でなく、魔法学校に行った。魔術と魔法の違いは軍指導か会社指導かである。

俺の行く魔法学校は多国籍会社指導の魔法学校に行った。オーストラリアはちょうど九月から入学出来たため、魔法高校の一年生として最初から学んだ。

入学式の時最初に話しかけてきたのはアランだった。

アラン「よう!!俺はアランだ。こつ見えて30歳だ。よろしく。君は?」

俺「カズナリじゃなくてジャックだ。ジャックって呼んでくれ。よろしくアラン。」

アラン「よろしく、ジャック。君はなにか魔法つかえるのか?」

俺「いや、魔法は使えないよ。」アラン「そうか、俺もだ。能力なら使える。」

俺はアランに触れた。アランはどうやら補助能力の索敵能力らしい。

アラン「秘密だがな。」笑いながら言った。

アラン「西洋じゃあ魔術、東洋じゃあ能力だ。だが西洋にだって能力者はいる。東洋にだって魔法使いはいる。」

俺「あんたは能力と魔法どっちも覚えたいのか?」アラン「そうだ。ジャック。」

俺「じゃあ、友好の証にF S I D交換するか?」

アラン「いいぞ。」俺とアランはI D交換した。

アラン「イングランド出身なのか?俺は北アイルランド出身だ。キョウダイ。」

俺「国籍はイギリスだが、物心ついたときにはオーストラリアで育ったんだ。」

アラン「だが、東アジアなまりだがなんでなんだ?」

俺「ずっとアジア系の友達と遊んでたからかな。」笑ってごまかした。

アラン「たしかにスコットランドとイングランドは仲悪いもんな。そりゃオーストラリアに逃げたくなるぜ。」

俺「まあ、よろしくアラン。」

こんだけアランと会話したが取ってる授業が全部違った。

俺は治癒魔法に移動魔法に防御魔法を授業でとった。

ブライアン「よう、俺はブライアンだ。君は？」

俺「ジャックだ。よろしく。」

ブライアン「同じ治癒魔法の授業をとってるがなんでなんだ？」

俺「病気が怖いからね。」ブライアン「おい、いきなりジョークでこまかすのか。」笑いながら話した。

俺「本当は傭兵になって世界を旅したいんだ。アンコールワット、ピラミッド、凱旋門とかね。そのためには敵に撃たれても自分で応急手当できるようにするために治癒魔法を勉強してるんだ。」

ブライアン「そうか、俺はオーストラリア軍の衛生兵になるんだ。だから授業をとった。」

俺はブライアンと別れ、寮に戻った。

アラン「どうだ、ガールフレンドは出来たか？」

俺「ボーイフレンドなら出来るかもな。」

アラン「ボーイフレンドならもう俺がいるだろ。」アランは笑いながら言った。

俺「そうだったな。お休み。」アラン「お休み、キョウダイ。」

次の日移動魔法について説明を聞いた。

先生「移動には種類がある。ワープという瞬間移動に、空を自由に飛ぶフライング、水の上を歩く水上歩行もだ。まあ便利な魔法だな。海軍や空軍には極めて重視される移動魔法だ。またものや人を転送する魔法もある。」

俺「魔法はそもそもいつからあるんだ？」先生「君はジャックか。」俺の服の名札を見て言った。

先生「そうだな。能力者が出現し始めた時だな。本来は魔法も能力も二十世紀までは空想として扱われた。」

俺「じゃあ魔法と能力には共通点があるんですか？」

先生「私はそう思っているよ、ジャック。」

俺は質問しまくりそれだけで授業が終わった。

ガブリエラ「ジャック！待って。」

俺「誰だ、ヒスパニックの姉さん。」

ガブリエラ「私はスペイン生まれよ。名前はガブリエラよ。」

俺「よろしく。ガブリエラ。」

ガブリエラ「ガーラでいいわ。みんなからはそう呼ばれてきたから。あなたなんであんなに移動魔法について質問したの？」

俺「移動魔法があれば戦場からすぐ撤退できるだろ。そっちはなんで話しかけてきた？」

ガーラ「あなたコピー能力者でしょ？だから話しかけたの。」

俺「どこで知った？」俺は興奮しながら触れるとガーラは真実を見抜く能力を持っていた。

俺「お前、能力者か？」ガーラ「そうよ、わけありならだれにも言わないから。」

俺「じゃあそうしてくれ。誰かに言えばただじゃすまねーからな。」

俺はガーラに一喝してから寮に戻った。するとアランがいた。

俺「今日は授業ないのか？」アラン「そうだ。」

俺「なあ、オーストラリアって意外に能力者多いな。」

アラン「そつだな、能力や魔術の規制が世界でも少ない国だからな。能力者と魔術者のバトルは面白いぜ。」

俺「ここにも格闘場があるのか？」

アラン「いや、そんなぬるいもんじゃないぜ。闘技場があるんだ。それも命をかけれる闘技場がな。まあ格闘も出来るけど、行くか。メルボルン闘技場に？」俺「おう！行くつぜ。」

## 闘技場

俺とアランは昼から授業がなかったので闘技場を見に行った。

メルボルン闘技場は闘技と格闘があった。格闘は日本と同じく戦力を磨くことを主目的としている。

しかし闘技場は命を懸けるゲームのようなものだ。闘技場でのルールは何を持ち込んでも良く。相手を殺せば相手の賭けたものを手に入れることが出来る。めったにないが引き分けの場合は賭けたものが返ってくる。

賭けるものはひとつだけである。たとえば石油利権と天然ガス利権を賭けたり、奴隷を賭けたりなど、いろいろある。全財産を賭けて戦ってもいいが、財産は基本戦死すれば法律によって家族に相続される。だが例外として孤独者同士が財産を賭け戦っても良い。この闘技は死のギャンブルと呼ばれている。なお代理人が闘技してもよいのである。

だいたいは奴隷やフリーの傭兵に代理で富豪は戦わしている。奴隷は多額の借金をしたものがなる。

西洋では人種差別による奴隷などでなく、借金返済不可能な人物などがだいたいなる。

東洋では奴隷制度はない。

俺「殺し合い好きじゃないから。格闘見てくるよ。」

アラン「そうか、俺も好きじゃないが自分が墮落しないように常に見て刻んでるんだ。」

確かに闘技場は観戦者が少なく、血生臭い。俺はアランと別れて格闘を見に行った。

メルボルン闘技場には砂漠、海、森、コロッセオ型があったが。闘技はコロッセオ型でしかできなかった。

俺はオーストラリアならではの砂漠の格闘を観戦した。

俺「なんだ？あの古いテントみたいなのは。」

常連客「オーストラリアの闘技場は初めてか？」

俺「ええ。イングランドから来たんで。」俺はさらっと嘘をついた。  
常連客「あのテントはアボリジニのテントだ。つまりこの先住民の建物だ。」

俺「先住民！じゃあアレの中に人が住んでいたのか。その場所を模したステージか。」

常連客「おい、初心者！今日の対戦者が現れたぜ。」

赤の魔術師「カミナリ！」すると雲から雷が対戦相手に降ってきた。

青の魔術師「防御！」すると透明な上半球体が青の魔術師を雷から守った。

常連客「お前は青と赤どっちが勝つと思う？」俺「まだ分かりませんね。」

常連客はみんな色で呼んでいた。この闘技場は対戦前に赤と青の魔法のローブに着替えさせられるらしい。

青の魔術師は津波を引き起こした。俺「なんだよあれ、どっから水なんか湧いてきたんだ！」

津波は赤の魔術師に向かって飲み込もうとしたが、赤の魔術師は飛び靴で飛んでぎりぎり回避した。

常連客「どうやら、友達どうしで戦ってるらしいな。」俺「なんで分かるんだ？」

常連客「普通は飛び靴なんて炎天下の砂漠ステージで使わないからだよ。赤は予測してたんだ。初見で戦う相手によっては一つの魔法で決まるからな。」

俺「そうなのか、能力者同士とじゃあ全然違うんだな。」

常連客「そうだな、能力者同士は基本消耗戦だな。なかには重力や遠隔操作で早期決着が出来る能力もあるが。」

青の魔術師はまた透明な球体に包まれ、酸素を確保して自分だけ水の底にいる。一気に砂漠から海に変わった。

青の魔術師は浮遊術で赤の魔術師と同じく空中戦で勝負する気だ。

赤の魔術師「アラシ！」すると青の魔術師に風と雨が襲うが、青の魔術師は透明な球体を守られている。

青の魔術師「ポセイドン!!!」すると水中から水で出来た大きな手が

赤の魔術師を握って飲み込み勝負が決まった。

常連客「今回は雲と水の魔法の戦いだったな。」俺「能力バトルと違って種類が豊富だな。」

常連客「だが能力バトルのほうがスピーディーで俺は好きだぜ。魔法バトルは時間かかるからな。」

俺はたしかに魔法は口に出さないと出ないし能力と違い、出るのが遅いと思ったが、二時間しかコピーできないコピー能力者の俺にしてみれば、便利かもしれない。しかし東アジアで魔法が使えないのが悔やまれる。

俺「解説ありがとう。」常連客「いいぜ、あんちゃん魔法習得がんばれよ。」

俺「あなたは魔法なんか使えるのか？」常連客「ああ、瞬間移動！常連客が一瞬で消えた。」

俺「そりゃ、いい魔法だぜ。」俺はアランのいる闘技場に行った。するとコロッセオで剣を持った二人の囚人服が殺し合っていた。

アラン「よお！もう格闘は飽きたか。」俺「あれはなんだ？」

アラン「あれが犯罪者や借金王の行く最後の場所だよ。あそこに行けばもう終わりだぜ。」

俺「魔法も能力も関係ないじゃないか。」俺は普通の剣一本での殺し合いにびっくりした。

アラン「古代ローマのコロシウムだな。」俺「北アイルランドにもあったのか？」

アラン「いや、だが中東や南アメリカそれにオーストラリアにこの制度があるのは知っていたよ。」

俺「ひでーな・・・」アラン「俺たちもこうならないように頑張ろう。」

すると一人の男が俺に話しかけてきた。謎の男「ちょっと二人で話さないか？」

俺はアランが死闘に夢中の間に謎の男に呼び出され、カフェで話した。

俺「あんた誰だ？」俺は触りながら聞いた。すると嗅覚能力者だった。



た。

俺「まさか！」それはおそらくシャーロックさんであった。

シャーロック「どうだ世界は広いだろ？俺はボブだ。よろしく。」

俺「ジャックだ。よろしく。」

ボブ「君のことは全て調べたよ。魔法学校に行ってることも。」

俺「なんでシャーじゃないボブさんは俺に魔法の实在を教えてくださいなかつたんだ？」

ボブ「ボブでいいよ。君とはイングランドでの友達の設定だからね。スミスもアヤノも無事だ。魔法は日本では使えない。例え実在したとしても一生日本にいる気だった君は信じたか？」

俺「そうだな、ボブ。名前短いし、黒人になったんだな。かつこいいよ。」

ボブ「前の名前は本当の名前じゃない、今もだが。前の名前は有名な探偵の名前から借りたものだ。」

俺「他にも能力使えんだろ？ボブ。」ボブ「そうだ、だが残念ながら時間のようだな。」

平服を着た能力者が瞬間移動で現れ、ボブをイングランドに瞬間移動で連れ帰った。

俺「やっぱり能力のほうが便利だな。時間差的にも。」

アラン「おい、ジャック！」アランが小走りでカフェに来た。

俺「どうだ、そっちが死んだんだ？」アラン「どっちも殺す勇気なくどっちも射殺されたよ。」

## 魔法の速さ

俺はブライアンと治癒魔法の授業を受けた後、魔法について話していた。いや俺が一方的に質問した。

俺「魔術師の格闘見たけどさ、なんで攻撃魔法より防御魔法の方が出るの早いんだ？」

ブライアン「ついに、闘技場に行ったのか。英国紳士？まあ俺は魔法に詳しいが魔法はほぼ使えない。」ブライアンは笑いながら言った。

ブライアン「一説にはフェアじゃないからだ。いきなり攻撃魔法を宣言された時、後出して防御魔法を言ってもそれで魔法が出る速さが一緒なら防御魔法なんて使えない。まだ治癒魔法のほうが使える。もう一説は防御魔法はあまり魔力が足りないからだ。だから攻撃魔法より速く出る。後捨のほうが有力だな。他にもあるが聞きたいか？」

俺「じゃあ、防御魔法は能力にも対応できるのか？」

ブライアン「それは能力大国の英国出身の君の方が詳しいんじゃないのか？」

俺「英国は能力大国なのか？」

ブライアン「おいおい、お前の故郷だろ？何も知らずにオーストラリアに来たのか？」

俺「ああ、本土とはそこそこ遠い小さい島で育ったからな。」また俺は嘘をついた。

ブライアン「俺は生まれも育ちもメルボルンだから知らないが、英国は補助能力者が多くてそれに工夫して魔法を使っている。だがイングランド出身の君は能力も魔法も一切覚えていない。まあ銃があったなら別だが、オーストラリアは基本的に銃は一般に禁止だ。国家機関と指定された会社だけが銃の所持をこの国では許可されている。」

2150年は日本は一般市民も犯罪歴がなければ、銃を所持してよかった。俺は日本に居たころはFSとリボルバーは離さず持ち歩い

ていた。

俺「案外、オーストラリアって安全だな。公共で攻撃魔法や危険能力を使うのも禁止だろ。」

ブライアン「そうだな、かつてもっとも安全だった日本より今はオーストラリアは安全かもな。でも日本はすげーよな。東アジア連合軍に優勢に持ち込んで休戦にしたんだから。」

東アジア連合軍とは中国や旧朝鮮半島に台湾などの連合国軍のことである。

世界は日本が負けると思っていたが、30年くらい前に中国で内戦が起こり日本が運よく巻き返したのである。

俺「お前日本好きなのか?」「ブライアン」「いや、日本はもう安全じゃない。だから俺はこの国からは出ないよ。」

俺「そうか、医者になるんだな。」「ブライアン」「まあな、親父も魔法医師だから。だから治癒魔法専攻なんだ。」

俺「なるほど、一つの魔法を磨いて上級魔術師になるんだな。」「ブライアン」「まあな、今から最低五年かかるぜ・・・」「ブライアンは習得の長さのため息をついた。

俺「攻撃魔法って自然系しかないのか?」「ブライアン」「いや、遠隔魔法とかあるが使ってるのは見たことないな。攻撃の上級魔術を取得ぶるやつはだいたい魔術学校に行くからな。」

俺「じゃあこの魔法学校は一般の仕事に就職できる学校なのか?」「ブライアン」「いや、軍人にもなれるし、傭兵にもなれる。下級士官だけだな。まあ当然普通に平和な仕事のも就けるけど。ジャックは兵士になるのか?」

俺「まあな、世界を旅するって前言わなかったっけ?」「ブライアン」「いや、聞いてないと思うが・・・。」

俺「じゃあ、今言ったな」「笑いながら言った。ブライアン」「ブライアン」「アフリカには気を付けるよ。」「俺「アフリカなんて住めないだろ?」

地殻変動によって南極大陸を除いて、一つの大陸ワグナーになったが、アフリカは気候が激変して南極大陸のように氷付いた。

ブライアン「アフリカは死の旧大陸と呼ばれているが、犯罪組織や怪しい新興宗教団体が魔法や能力を使い秘密拠点を作ってアジトにしている。」

俺「そうか。」俺は腹抱えて笑った。そして笑いながら俺は次に言った。

俺「寒いし、異常者が多いし、そんなとこ誰も行きたがらないだろ。」するとブライアンは真面目に俺に質問した。

ブライアン「もしお前が将来世界を旅してアフリカに答えがあったらどうするんだ？」

俺は今までの人生を走馬灯で振り返り、真剣に答えた。

俺「そうなれば、俺は喜んでアフリカに答えを見に行くよ。それが俺の宿命だ。」

俺はブライアンと別れ、ガブリエラに会った。

ガーラ「はい、コピーさん。」俺「俺はジャックだ。」

ガーラ「あんた、ジョークも通じないの？」ガーラは笑いながら言った。

俺「どうした？ なにか用か。」

ガーラ「ちゃんと話してなかったから。」

俺はまたブライアンと話していたラウンジに戻り、ガーラと会話した。

ガーラ「最初の失礼な態度謝るわ。あなたはなぜ瞬間移動魔法を取ってるの？」

俺「世界を旅するためだ。君は？」

ガーラ「私は交通機関に就職するためよ。結構平和的な使い方ですよ。」

俺「そうか、スペインは確かアメリカと陸続きだよな？」

俺「まあな、でも本土じゃなく小さい島で育ったからね。」俺はイギリスの島出身設定を貰ったと思った。

ガーラ「私はバルセロナ出身よ。」

俺「バルセロナは建築がすごいよな。」

ガーラ「ほとんど核暴発で壊れたけどね。でも地中海の港町は素敵よ。」

俺「機会があればまたスペインに行ってみるよ。その時はガイド頼むよ。交通会社の人間としてね。」

ガーラ「まあ、試験に合格したらね。」

俺とガーラは別れ、寮に帰った。

アラン「ジャック、なんで二回もラウンジに戻ったんだ？」

俺「ああ、立て続けに友達に会ったからだよ。索敵能力で調べたのか。心配してくれてありがとよ、キョウダイ。」

## 魔力と不正

俺はレベツカに通信してみた。

俺「レベツカ、よかつたら俺の成長見てくれないか？」

レベツカ「久しぶりジャック、いいわよ。」

俺「今オーストラリアか？」

レベツカ「まあ、キャンベラだけど。」

俺「いつなら格闘できる？」

レベツカ「じゃあ基地に来る？」

俺「ああ、だがいいのか？」

レベツカ「私が迎えをよこすから。」

レベツカに指定された日にメルボルン闘技場に行くと兵士がいた。

兵士「あなたがジャックさんですね。」

俺「はい、誰ですか？」兵士「レベツカの使いです。」

兵士はそう言って俺に触れて瞬間移動した。すると砂漠にあるどこかの基地に来た。

レベツカ「カズナリ、ここが私の所属してる基地よ。場所は言えないけどね。」

俺「ああ、敵国の攻撃を防ぐためか。」

レベツカ「まあね、とりあえず食堂に行つて話す？」

俺「いや、練習場で俺の魔法がどれくらいか試してくれ。」

俺とレベツカは射的場に行き、魔法格闘をすることになった。

レベツカ「あなたから来てもいいわよ。」

俺「余裕なんだな。ならこっちから行くぜ！」

俺「移動！」俺は瞬間移動魔法を使って後方を取った。

レベツカは俺が瞬間移動に来た瞬間にナイフを手に取り、後ろに振った。

俺「危ねー!!」俺は危機一髪でしゃがんで回避した。するとレベツカがナイフを振り下ろしてきた。

俺は速攻で防御魔法を唱えた。俺「防御！」するとナイフが弾かれ、

地面に刺さった。

俺「終わりだ！レベッカ。」俺は隠し持っていた拳銃コルトで両足を撃った。

レベッカ「回復！」両足はみるみる回復していく、俺はこれでは勝てないと思い、突撃した。

するとレベッカが軍支給用拳銃ベレッタで俺に撃ってきたが、とっさに俺はコピー能力で他人の能力を使い瞬間移動した。

そして後ろからハンドガンで殴って気絶させた。その後レベッカは医務室に運ばれた。

レベッカは目を覚まし俺に言った。レベッカ「最後能力とかずるくない。」

俺は最後防御魔法で銃弾を防ぐのが間に合わなかったために、護送された時兵士の能力をコピーしていた。

俺「悪かったよ。最後はお前が勝ってたな。」

レベッカ「いえ、私もあなたを油断してたわ。これが戦場なら私死んでるわね。」

俺「まあ、お互いいい教訓になったんじゃないか。」

レベッカと俺は食堂に行き、俺のもう一つの魔法の話をした。

レベッカ「あんたも治癒魔法使えるんだ。」

俺「ああ、今回使わなかったがな。だがレベッカほど魔力は高くないから、最後撃たれた時能力使ったんだ。」

レベッカ「まあ、入学してまだ一か月わ。瞬間移動と防御の一回で魔力は無くなるわね。」

俺「だから短期決戦型の勝負で俺は勝ちたかったんだ。だが勝ちにこだわり過ぎて俺は他人の能力を使ったけどね。」笑いながら俺は言った。

レベッカ「笑い事じゃないし。」レベッカはイラッとした。

俺「ところでオーストラリア軍は上級能力兵と上級魔術兵がいるのか？」

レベッカ「それは言えないわ。ただ私は日本で情報収集してる通信兵ってことだけなら言えるけど。」

俺「だから日本の格闘場の大会に出てたのか。」

レベッカ「CIAにMI6が関わる日本の諜報機関『世界公安警察』が創設されたからね。」

俺「世界公安警察？」

レベッカ「あの大会の優勝者はそれに入れたの、暗殺されたけどね。」

俺「ソーヤが入る予定だったのか？」

レベッカ「まあ・・・そうね。でも多分他の人が代わりに入ったんでしょね。」

ファイード「なに話してるんだ？」レベッカ「ファイード、こちらジャックよ。」

俺「よろしく。ファイード。」ファイード「こちらこそ、ジャック。東アジア出身か？」

俺「いや、イングランド出身だ。」ファイード「そうか、悪かったな。ずっと東アジアで情報活動してたから、耳がまだ発音になれてないんだな。」

俺「いや、俺は東アジアなまりなんだ。友達が東アジア出身が多くてね。」

ファイード「そうか、俺は能力兵だ。魔術は一切使えないよ。また機会があれば一戦交えようか。」

俺「ああ、ファイード。」ファイードはそう言って出て行った。レベッカ「ファイードは中東系だけど生まれも育ちもシドニーだから。」

俺「そうか、まあオーストラリア軍にはいろいろな兵士がいるんだな。」

レベッカ「ところでケイトの謎解けてきた？白骨化の。」

俺「ああ、友達の兄さんがどうやら犯人らしい。だが所在が分からないし、多分勝てないだろう。」

レベッカ「そうだったの・・・まああせらず力磨けばいいわ。」

俺「言われなくてもそうしてるさ。あとコルトを瞬間移動能力の兵士に返して。」



レベッカ「これあなたのじゃないの！」俺「少し借りたんだ。能力  
とっしょにな。」

レベッカ「そっか、まだ兵士じゃないあなたは銃所持禁止だもん  
ね。」

俺はまた、迎えに来てくれた能力兵に寮に送ってもらった。

アラン「おい！ジャック、どこ行ってたんだ？」

俺「ちよつと遠くにな。お前は今日は何してたんだ？」

アラン「ずつとFSで能力映画見てたよ。全部能力や魔法が発生す  
る100年前から制作されてんだぜ。予言だな！」

俺「そつだな。便利な世の中だ。」俺は徐々に格闘し魔力消費したた  
めに疲れてすぐ寝た。